

主人公

「万物の霊長と言われた人間は二番目の存在になります」
人類は誕生してから、最も優れた存在として君臨しましたが、
この世は無常であり、ついにその座を明け渡す時が来たようです。
花園大学 仏教学科特別教授の 佐々木 閑^{しずか}氏はきっぱりと語ります。

「“人間性を持たないA Iが人を超えることなどできない”
といった主張は、この先どんどん説得力がなくなり、
A Iを最高の知性として承認せざるを得ない時代が来る」



花園大学 特別教授
佐々木 閑 氏

人類は過去に一度、文字を発明した時代に危機があったと佐々木氏はいう。
文字で記録すると、記憶しないために人間の頭が悪くなってしまった。
しかし、文字と共存することによってより高次の文化形成を実現し、
当時の人間は文字を発明した危機を脱出した、というわけです。

生成A Iは単なるプログラムで動くコンピュータとは違い、
人間と同じように言語を習得し、外界を見聞きします。
そこで得られた情報を体系的に組み上げ、推理し、
新たなものを生み出す能力を備えているうえに、
審美眼もあり、感情を表現することもできます。

A Iの躍進は日本の就業構造を大きく変化させるでしょう。
経済産業省は「2040年の就業構造推計」で事務職が約440万人、
大学・大学院卒の文系で約80万人が余剰となる可能性があるという。

多くの人の仕事内容が変わり、職場も変わる人が増える中で、
誰もが新しい環境で力を発揮できればいいのですが、
中小企業の現実是非常に厳しいものがあります。

しがらみを抱えると 雑念や妄想にとらわれる

人生を通して本当にやりたいことに出会い、
末永く続けることができる経営者は幸せ者です。

それなりの成功を収めた創業経営者にはよく見られますが、
多くのしがらみを抱えた後継経営者の場合、そうはいきません。

本来は事業家としてやりたい仕事がありましたが、
急遽、実家の会社の面倒をみるために戻ったAさん。
ところが父が残した巨額の借金が次々と明らかになり、
常に銀行への気遣いが必要な日々を悩ましています。

たまたま大手の下請けメーカーをしている妻の実家が、
後継ぎで困っていたため後継経営者として入社したBさん。
独自の技術力を活かして自社商品の取り組みを考えましたが、
大口得意先の依頼に振り回され、自立型経営は進まない状況です。

子会社の立て直しを要請され、社長を引き受けたCさんでしたが、
社員による不祥事が次々と噴出し、その対応に追われています。
これらの事案は社長就任以前に起こっていた問題ですが、
何のために社長になったのか…と戸惑いは隠せません。

会社が将来の発展に向けて重要な転換点にあるため、
覚悟して経営を引き受けたが、思い通りには進まない現実。
ところが「私に何ができるのか?」「なぜ、私はここにいるのか?」
と、経営のトップが雑念や妄想にとらわれているのは惜しい限りです。

なんとか将来への光が見いだせないか…と思っているものの、
心の中は雑念や妄想だらけ…。はたしてどうしたものか?

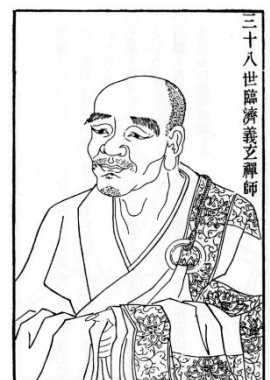
あなたの人生の主演は あなた自身である

～ 随处に主となれば 立処皆真なり ～

臨済宗の開祖 臨済義玄が残した言葉です。

どんな組織においても、どんな境遇であっても、
自分が主人公となり、自分の判断で行動するなら、
そこでの生き様はすべて真実である、という意味です。

映画やドラマに出てくる「主人公」は、禅に由来する言葉です。
主人公とは「本来の自己」つまり、本当の自分のことであり、
あなたの人生の主演は、あなた自身なのであって、



臨済義玄禪師
(佛祖道影: 禅文化研究所)

堂々と胸を張って生きなさい、との教えです。

私たちは様々な人とのつながり、つまり「縁」で支えられています。
ご縁のある多くの方のお力添えで、今を生きている一方で、
その人たちとの様々な“しがらみ”も背負っています。
AさんもBさんもこれまで支援していただいた方との、
“しがらみ”の中で苦しんでいるのが実態です。

Cさんの場合も自分が直接に関わっていませんでしたが、
トップなら、それが自分の知らない過去の不祥事であっても、
自分の問題としてとらえる“覚悟”が足りないのかも知れません。

「主人公」の教えは経営者の生きざまにピッタリですが、
社員一人ひとりに向けたメッセージでもあります。



人間尊重の経営を貫いた
出光佐三

出光興産の創業者・出光佐三は、社員の人間性を尊重し、
禅の教えを経営に活かした反骨精神に溢れた経営者でした。
「一人ひとりが経営者であり、仕事は完全に任せるのが“出光流”」
として、社員が依存心を捨て、主人公として活躍できる方針を貫きました。

佐三は入社式の訓示でこのように述べています。

「3年ほどして他社との商談があったら、他社の人は最後に、
それでは持ち帰って上司に報告して返事します、と必ず言う。しかし、
“これは自分が決める”と思ったらその場で『よろしい』と返事しなさい」
「主人公」という禅の教えを若い社員にも落とし込んだ、みごとな例です。

A I 時代を生きる智慧 ～ ぶれない心は 自分でつくる ～

A I の発展は、私たちに大変な利便性を与えてくれる反面、
私たちのアイデンティティ（存在意義）を奪います。

「私なんか、この世にいらなくてもいいんじゃない？」
と、人生に迷い、生き方を見失う人が増えるかも知れません。

しかし仏教の教えは、より高次のものを求めていると佐々木教授はいう。

「今、世の中で役に立っているから、人生の意味があるのではない。

“自分自身で、自分がこの世で存在する意味をつくること”

が仏教の教えであり、仏教はこれから役に立ちます」

仏教の中でも禅は、自分の心を整えて、
実際に何をすればいいのか、を教えてくれる。
まさに“ライフスタイル”（生きる生活様式）であり、
禅のライフスタイルがこれからの現代人の心を救うという。

私たち人類は、万物の霊長の座をA Iに明け渡す転換点にいますが、
どちらが上か下か、なんてどうでもいい話なのかも知れません。
人間一人ひとりが「主人公」の意識をもって行動するなら、
イキイキとした、何者にも代え難い輝きを発するでしょう。

ボーっとしていると、なんでもやってのけるA Iによって、
私たち経営コンサルタントが最も早く職を失います。
A Iよりも愛のあるアドバイスができるよう、
これからも日々精進して参ります。

株式会社新経営サービス 田須美 弘（2026. R8. 7）

▼ご意見・ご感想は直接下記までご連絡ください
E-mail: tasumi@skg. co. jp

